

## 戦後の思い出新たに

福岡県 安達 ひで子

昭和二年八月、折りからの不況で失敗をした父は、六年に北朝鮮に住む義兄を頼って親子六人、黄海道沙里院邑に落付きました。

昭和十一年四月「北票面内宗里」の従兄と結婚、農家の嫁として、それ以来重労働をしなければなりませんでした。

昭和十四年七月、夫は出征し北支とだけ言ひ残して去りました。とても辛い苦しい日々が続きました。十八年二月南方部隊より一通の葉書が参りました。どこで何をしているかも解らない日々をどれだけ恨んだかわかりませんでした。忘れもしません八月十五日には、母の初盆のおかざりの最中に友達からの知らせで日本敗戦を知り、二人抱きあって泣きました。八月末日本人は危ないと友人である黄さんが早々逃げるやうにと知らせてくれ

ました。十キロも離れた、戴寧邑の日本人小学校へ避難をしました。そこへ鮮人の官憲により少しばかりの衣類、時計貴金属類を持って行かれましたが、一心ここに落付くことになり、一部屋に四十八人がはいることとなりました。昼は秋の収穫時なので使役に行き、三合の米と三円得ることとなりました。農作業のないときは、南票面の保安官駐在所へ炊事婦に行き、負け戦のみじめさを味わいながら日夜働きつづけました。

おかげで二人の子供を食べさせることが出来ました。もう十二月の極寒にはいるとすべてが凍りつき寒さに小ふるえながら、夫、子供のみ考え、必死に働きました。年も明けた昭和二十年三月、日本に帰る相談をひそかに始め、脱出を決意し、持っている物も現金に替え、脱出を決行しました。途中ソ連軍、朝鮮人に目に付かないため、少人数で組んで昼は森や岳にかくれ、夜道を声を立てないように、子供の泣き声に、おびえながら二十キロの道を歩き、小さな家を見つけました。幸い空家で二日間ぐっすり寝込み、夜明を待って三十八度線に向かう。それから、腰までつかる川を渡り、山中では追剥ぎに

合いながら、やうやく三十八度線に着き、北の海州港へ着く。

そしてここで一か月間ソ連軍に攔まり、飛行場整備で働かされることになったが、子供達はご飯をたくさん食べられると喜んだ。四月二十日夜陰に乗りまたもや脱出、海は干潮を利用してドロ沼のような足元を用心しながら歩く。

五十メートル間隔で照らされる燈光器と警備の声におびえ、満ちてくる海水になやまされながら三十八度線の南側についたとき歓声が上がった。それから青丹から汽車で、すし詰めのまま開城へ、京城では西本願寺へ泊めて貰ったが、これも満員の難民で、清津の人々と一緒にした。昭和二十年十一月八日博多港へ着いたときの嬉しさは言葉に現すことは出来ません。福岡の護国神社に一泊、里の久留米に落付いたとたんに倒れ伏したままでしたが五日ほどで起き上がることが出来ました。今日までの頑張り、強くたくましい女が一人、七二才、書の道で暮らしを立てて生きております。戦死した主人と二度目の主人の位牌を守って生きていきます。

## 残酷行状記

大分県 阿部 美代子

昭和二十年八月十日早朝、「艦砲射撃が始まる、ソ連兵が上陸してきます、早く駅に集まってください」と大声で叫んで通る声にびっくりした。庭の防空壕まで荷物を取りに行こうと思うが、足がすくんで動けない。私どもの鉄道官舎は、海を見渡す良い地形の丘に建っている。海からの射撃だと一ぱつで吹つとぶ。B 29がきたときに、石油タンクが攻撃され、爆弾が雨のように降り、黒煙りをあげて燃えさかる光景を見ていたので恐ろしいばかり。

「日本は負けている、近くには軍隊はいない、軍人の家族はみんな内地に帰ってしまったている」この噂は早くに聞いていたが、ほんとうだったな、と感じました。とにかく、命あつての物だねだと母と妹と私、三人で駅に向かつて走った。